

貴い力を妊む水

三重大学大学院人文社会科学研究科 地域文化論専攻 地域社会文化論専修

109M212 平田康恵

目次

1 章	はじめに 1
2 章	カミと母神 4
3 章	水の性質 9
4 章	若水信仰について 1 3
5 章	水の女 2 1
6 章	まとめ 2 5

1 章 はじめに

人というものを考察する時、信仰が大きな要素であると思われる。文化から芸術、政治に至るまで、かつては宗教・信仰の下で発展してきた歴史があるからだ。信仰の中には民間信仰と分類される形態がある。民間信仰とは教義、教団に依らず、民衆と称される一般人が主体となり、儀式などを執り行う信仰である。人々の間に自然発生し、生活に密着し、習慣化した信仰形態だ。それゆえにダイレクトに人々の持つ世界観や道德観が反映されるものと言えよう。日本特有の宗教である神道は、この民間信仰の形態が多く取られている。

大衆の持つ世界観・死生観といった人々の心の動きと社会との関係性を考察する上では、民間信仰は対象に相応しい。民間信仰の考察を通して、本論で、少なくとも日本に於ける民衆の世界観・死生観の一部なりとも読み解きたい。

民間信仰の中にも様々な信仰対象がある。その中でも私は母神信仰に関心があり、卒業論文に於いてうつぼ舟漂着譚を対象に、母神と水との深い関係性を考察し、纏めた。そして母神信仰の新しい捉え方を提案する結論に至った。本論では卒業論文で提案した母神信仰への視点はそのまま、新たに抱いた疑問を挙げて考察をすすめたい。その為、私が母神信仰についてどのような考え方を提案したのか、以下に説明する。

母神とは、父権社会より先行して存在した母権社会に多く見られ、古く原始的信仰の対象である。万物を産み出し、豊穡を与える存在として母神は信仰されてきた。例えば世界で、最も古いと言われているメソポタミア神話に於いては、おそらく海の化身であろう塩水の神大母神ティアマトという存在がある。この大母神が神々を産み出し、大母神の死体から天地が出来たとされている。海と言っても原初の混沌状態に近い形態だろうと思われる。但し、このような混沌状態と区別し、この状態から進歩し、人格を有した存在として母神を認識する考えがある。その際、主に海や混沌とした状態の母神を原初海洋あるい

は大母神と呼ぶ。母神は大地の化身にみなされがちであり、子神（息子）とセットにされることが多い⁽¹⁾。

母神と水とは関係が深い。スクナヒコナやウントクなどの水に関係する童子を柳田国男は‘小サ子’と呼び、石田英一郎は「これら水界の小サ子の蔭に、たえず彷彿として現れるものは、その母とも思われる女性の姿なのである」⁽²⁾として、母子神信仰と水の間を小サ子譚、うつぼ舟漂着譚などから読み解いている。石田は「大地はその豊穡力を水に負う。太古の大地母神はまた、多かれ少なかれ水の神であった」⁽³⁾と述べている。それだけ水と母神が関係深いということであろう。

私が卒業論文に於いて考察対象にした、うつぼ舟漂着譚も母神と水との関係を表しているとされている。うつぼ舟漂着譚とは、‘うつぼ舟’と呼ばれる中が空洞で密閉されたものに、主に女性が詰められ、漂着したという民間伝承である。漂着後は女性は死んでしまうケースが殆どで、また子供を出産するケースも多く、この子供が一族の始祖だとする伝承もある⁽⁴⁾。母子との関連だけでなく、うつぼ舟を子宮と考え、海を母神と捉えて、うつぼ舟によって母神が現世に寄り来たり、現れる様を書いたものとする考えがある。喜多路の『母神信仰』に於いて書かれた考えである。柳田の「うつぼ舟の話」折口信夫の「石に出て入るもの」や「靈魂の話」によると、うつぼ舟のような空洞には神霊が宿ると古くから考えられており、その考え方を踏まえた上で、舟に女性が乗っているのは母神が自分自身を身ごもり、舟から女性が現れるのは母神が自分自身を生み出すことを表しているとされている。しかし、私は別の見方が出来るのではないかと考えた。この舟から現れる女性は母神の代理に過ぎず、仮にこの漂着した女性が神だとしても、それは母神が生んだ子神であり、母神自身ではないという見方だ。結果、母神はうつぼ舟の様な空間、すなわち子宮を有する存在であり、その子宮を有することが母神を神聖な存在たらしめていると考えたのである。つまり母神への信仰は、何かを宿すこと、出産よりも妊娠を重要視していると結論を出した。また、この神聖な力を宿す内部空間の存在が重要であるという考え方は、母神信仰だけでなく日本の民間信仰全体にも見られるのではないかと、卒業論文の結びに

述べた。

以上が私の卒業論文の説明である。卒業論文で見られる様にうつぼ舟漂着譚は海流によって母神の代理あるいは子神が現世に現れる事ができている。うつぼ舟漂着譚以外にも、母神が子神と見なせれる存在をこの世に送る為には、常に水から出入りしている。このように水は母神と人が間接的にしろコンタクトする際に見られ、寧ろ、水を通して人は母神と触れ合う機会を得ていると言えよう。水辺が異界の出入り口だという信仰はある⁽⁵⁾。小野篁が井戸を抜けて閻魔大王の補佐を務めに六道界へ向かったというのは有名なエピソードである。折口は「妣が国へ・常世へ」で、人々は常世の国は海の彼方にあると信じていたと述べているし、普陀落渡海は海を越えて普陀落山に向かう信仰行動であった。

古代の人々は、この世とあの世を繋ぐ力が水にあると考えていたのだ。それだけではなく、うつぼ舟によって子神を運ぶ様に、水は異界から何かを運ぶことも可能だと考えていた。卒業論文では気付かなかったが、言うなれば水は人と異界、異界に存在しているものとの媒介だと考えられる。この媒介としての水の力と母神の性質とが何らかの合致を見て、深く関係するようになったのではないだろうか。

そこで改めて母神の性質を考察した結果、疑問が生じた。それは私が卒業論文で得た母神信仰の捉え方では母神の在り方に矛盾が生じるという事であった。私は、この矛盾の解消案は水と母神の関係の中に見つかるのではないかと考えた。

以下に、この新たな疑問点の説明、及び、その解決として水の媒介としての力と母神信仰との関係を考察するものである。

2 章 カミと母神

民間信仰の中にも様々な信仰対象があることは先述した。しかし根本的な信仰観は対象が細分化されようが、仏教などの体系だった宗教と混ざり合おうが、変わらずに存在している様に思われる。その信仰観とは、神聖な力を持ったものは他の世界からやって来るというものである。折口信夫の言うマレビトや柳田国男の言う祖先神は、何処かから我々が住む此の世にやって来ては、我々の知らぬ何処か、つまりあの世に帰って行く⁽⁶⁾。このように神聖な敬うべき対象である存在は、我々が呼び、迎える存在なのである。

神聖な敬うべき対象と水によって異界から運ばれる何かはイコールの存在であると考えている。この異界から迎え敬うべき対象を本論ではカミと表記したい。これらの存在は、折口の「靈魂の話」にある‘たま’とブラッカーの‘神’が近いものと考えている。‘たま’から現世に存在するものを除き、‘神’と別種であると考えられている祖先神のような‘タマ’も含めて考えたいのでカミと表記する。また、神との差異を図る為にも片仮名で表記することにした。次に、この異界から迎え敬うべき対象であるカミについて、‘たま’と‘靈的な存在’を例に説明したい。

折口曰く「日本の「神」は昔の言葉で表せば、たまと称すべきもの」⁽⁷⁾であり「たまは抽象的なもので、時あつて姿を現すものと考えたのが、古い信仰の様である」⁽⁸⁾。この‘たま’に善悪の両面があると考えられ、善の面を‘神’、悪の面を‘もの’と分けるようになったというのが折口の論である。また英国の民俗学者であり日本学者でもあった C・ブラッカーは著書『あずさ弓』に於いて、日本のシャーマンが交渉をもつ靈的な存在の中で、人よりも優位にある（つまり知性や力が人を超えている）種類の中で最も重要にして最強なのは神だとしている。ただ、この神はどちらかというと折口の‘たま’に近いと考えられる。以下にブラッカーの考えを紹介する。

霊的な存在のうち、優位の二つの種類の中で最も重要で強力なものは神である。こ
ら霊的なあらわれは、仏教が紹介される以前から神道では主な礼拝の対象とされてき
た。それらは捕らえどころがなく、えたいの知れない異質のものなので、描写するこ
とは難しい。それらはおそらく聖なるものの顕現であり、人間の世界における聖なる
力のあらわれとして理解するのが最も適当であろう。十八世紀の神道復興の大学者で
ある本居宣長は、日常を超えるすべてのもの、他の、強い、恐ろしいものは神と呼ば
れると述べている。(中略) これらのものには皆、希薄な空間を通してみえるように、
力の存在を示す理解し難い他者的なものが示されている。(ブラッカー, 1995,
p23~24)

このようにブラッカーは神について記述している。またブラッカー曰く「これらのもの
は捕え難く、影のようで、ほとんど形がないかもしれないが、その性格は多様で変化に富
んで」⁽⁹⁾いるが共通の特徴を備えているという。まず「第一に彼らは、我々と彼らの世界
を分けている障壁を自由に、勝手に越えることができる」⁽¹⁰⁾としている。これは章の冒頭
で述べた民間信仰に見られるカミの概念と同様である。また神にはそれ自体の形はなく、
目に見える姿は一時的変装であり、「適当なうつわや乗り物がなければならないようだっ
た」⁽¹¹⁾と述べている。このうつわの一つがシャーマンである。更に神は本質的に非道德性
であり、「その性質は両価的であって、善でも悪でもないが、それが受ける扱いによって、
人間のために恵み深くも、破壊的なものにもなり得る」⁽¹²⁾としている。以上のブラッカー
の神についての説明内容は折口の‘たま’の説明内容と変わらない。ブラッカーは神を折
口の言う‘たま’と同様のものとみなしていたと考えられる。

またブラッカーは死霊を区別しタマと称しているが、日本民俗学ではこの死霊と神の区
別は「依然として論争の余地を残している」と述べている。ブラッカーによれば岡正雄は
神と死霊を区別しているが、柳田は亡くなった祖先霊が神になるものと考えているし、折

口と松村武雄はタマは神を含む霊的存在より古い原始的な形で、そこから神が発展したと考えている。

本論ではこの死霊であるタマも神も同種だと見なして考えている。死霊も、神も、妖怪も、内蔵している魂とでも言うべき力は同じだと考える。ただ、存在のありかたや、力の現れ方が違い、別種の存在のようになっているのである。言うなればイルカと人間が同じ哺乳類であるのと同じ道理である。

ここで神とカミを比較すると、神は恵比寿神や天照大神など、一般的に‘神様’と呼ばれ神社などに祀られており、個々の性格や能力を与えられた人格神と考える。つまり、折口が‘たま’から分岐していった善の面と考える存在である。カミとはもっと原始的な崇拜対象であり、はっきりとした人格を有しておらず、根源的な要素とでも言える様な曖昧な存在と考える。つまり折口の言う‘たま’であり、ブラッカーのいう‘神’や‘タマ’を含む、シャーマンが交渉をもつ霊的な存在である。神とカミは限りなく近い存在ではあるが、カミは神を内包する。言うなれば仏も神もカミの一種と呼ぶことが可能なのである。

ここで、以上のカミについての理解を踏まえて、少し母神について触れたい。母神の中でも原初海洋という混沌とした、原初の状態を体現している存在があった。かろうじて母らしい表現はされているが、それも万物を産み出した為だ。私はこの原初海洋と呼ばれる原始的な状態に近い母神を水母神と呼びたい。先に述べたティアマトのようなものは水母神と言える。この呼称は水に深く関係し、水の様な状態の母神について呼ぶ際に、便宜のために私が仮に作り使用するものである。大地を母神と見なしたものが地母神であるとするならば、海や川を母神と見なしたものは水母神と言えよう。また以上に挙げた水母神の性質を見れば、水母神はカミとしての特質をよく表している。

本章の冒頭で、カミは現世に来るもの、呼ぶもの、迎えるものだと考えられていると述べた。カミは呼ぶもの、迎えるものだという考えはカミの出現、ひいてはカミが出現したと認識する事に重点を置いていると取れる。カミが出現しなければ迎えようがないし、カ

ミを迎えるという事はカミを認識しなければ出来ないからだ。喜多の考え方はこの考えに沿ったものだろう。カミは此の世に現れねばならない。だから、うつぼ舟に乗っていた女性は水母神自身だと考えねばならないという結論になる。しかし、私はこの考えに違和感を覚え、母神は此の世に現れず、代理や子供を送り出したに過ぎないという見方をした。すると、水母神とカミとの矛盾が生じてしまうのだ。我々が呼んで迎えるべきカミである筈の水母神は、呼んでも此の世にやって来ない。やって来たとしても代理や子供なのだ。では出現していない母神、特に水母神はカミではないのだろうか。そうは思えない。イザナミやトヨタマビヨリなどの母神が敬うべき崇拜・信仰対象でないとは言えない。第一章で述べたティアマトのような存在もある。ならば、やはり母神は自分自身を妊娠し、うつぼ舟にのって人の世に出現したという喜多の考えを取るしかないのだろうか。そうではなく、母神は出現しない特殊なカミと考えられないだろうか。例えば、柳田が考察していた小さ子譚に出てくる女性がいる。この女性は子神と考えられる子供を人に渡すだけで、女性自身は水辺からは動かない¹³⁾。この子供が、母神と思しき女性の靈験を表していると言える。また母神と言えるかは少し微妙だが、水中に住まう女性が腕を貸してくれるという腕貸淵伝承では、女性は姿を見せずに腕を池や泉の淵の水面に浮かばせるだけである。腕を返す時も水を介して返される。このように母神が出現しない例は幾つかある。水精が人間の元に嫁にくる竜宮女房譚は人の元に来てしまっているが、それでも靈験をである子供を残し、その女房は水の中へ帰ってしまう。やはり、水の中でしか彼女達は存在できない。

そもそもカミが出現せねばならないのは、人々がカミを崇拜対象とする理由、靈験や畏怖を感じる為である。逆を言えば、出現せねばカミという崇拜対象になれない。だが逆を言えば、出現せずとも靈験や畏怖を人々に感じさせる事ができれば、カミとみなされることになる。水母神を出現しないカミとみなした場合に起きる矛盾を解消するには、水母神が現世に現れたりせずとも、水母神の靈験や水母神への畏怖を人々が感じられる事が必要である。水母神に代わり水母神の靈験を人々に知らしめているのは水母神の代理人や子神と言えるだろう。だが問題は、彼らと水母神を繋ぐ何かである。彼らの背後に水母神の存

在が感じられなければ、彼らが人々に与えた霊験や畏怖は彼ら自身のものとみなされてしまふ。では彼らと水母神を繋ぐものは何か。それは水であると私は考える。

水と母神が関係が深いことは先述した。水にまつわる場所は異界への入り口とみなされ、母神にみなされる女性の出現スポットでもある。その事は、先述した小法子譚の女性や、池や泉の淵に腕を浮かべて貸してくれる女性の事例で分かると思う。これらの例や、うつぼ舟漂着譚のように、水は母神とみなせる女性らの仲立ちをしている。私は、水はカミと人との媒介なのだという考えをますます深めた。では、どのようにして媒介しているのだろうか。水の信仰から考察してみたい。

3 章 水の性質

水以外にも聖なるものとの媒介としての性質を持つものはある。例えば木は神が降り立つ依代としての代表格であるし、石も磐坐としてよく見掛ける。折口の「石に出で入るもの」では‘たま’が石に出入りし、成長したと書いている¹⁴⁾。また柏手は神を呼ぶ為の音と言われており、神事の際に掛け声をかける事もあり¹⁵⁾、音も神との媒介と言える。盆の時に迎え火と言って火を焚く風習もあり、火もあの世との媒介と言えるかも知れない¹⁶⁾。だが、その中でも私が水の媒介としての力に注目するのは、母神が関与するからだけではない。水は触れ、体内に取り込む事が可能である。先に挙げた例と違って、儀礼を行ったり崇拜する人と限りなく同一に近づけるという特徴がある。故に、私は水の媒介としての力に注目するものである。

ではその水の信仰はどういったものがあるだろうか。一概には言えず複雑ではある。具体的に考えれば、水を禊などに使用する、或いは神前に捧げる例はある。井戸や、泉や、水の沸き口など水に関係する場所を聖なる場所として祀る例もある。大きく括れば川、海などを異界そのものとして敬う例もある。水はこのように様々な様相を呈していて、このことが水への信仰を分かり難くしている要因でもあり、水への信仰を成立させている要因でもあるのだろう。

水の信仰については「全体に我々の祖先が水の神に対して、曾て抱いて居た信頼と感謝の念は、可なり早くから薄れ又衰へつゝあつたのである」¹⁷⁾。「日本ほど水の神の威徳を深く感じなければならぬ国はないのに、我々の学問でも、神道でも、歴史でも、この信仰の変遷が現在は不明に属して居るのである」¹⁸⁾と柳田も語っており、ずっと以前から水の信仰への理解が薄れていた事が分かる。だが柳田は水に関する信仰・伝承について、うつぼ舟漂着譚の紹介など多々言及している。幾つかを紹介すれば「海神少童」では水の神から

もたらされたハナタレ小僧やウントクといった、一寸法師のように小さい童子‘小さ子’について述べている。この‘小さ子’の一種と思えるのが「田螺の長者」で紹介されている水神様から授かった、田螺の息子や蛇の息子である。これら水の眷属が人と婚姻を結ぶ話、竜宮女房譚の類も多々、紹介されている。更に河童について『妖怪談義』などで熱心に考察をしており、河童は水霊であり、古い水神信仰の名残であるとしている。また柳田は「とにかくに古く我々が畏れまた拝んだのは、水その物ではなく水の中の何物かであり」¹⁹とし、水という捉えにくい物より分かりやすい魚などを水と同様にみなし、崇拝したと述べている。

他にも、例えば折口は「若水の話」で水と魂の関係を考え、水が若返りをもたらすという若水信仰について考察している。また「水の女」では、禊を手助けした巫女の存在、水の女神について考察している。この「水の女」で取り上げられた‘たなばたつめ’という神を迎える巫女の存在は「たなばたと盆祭りと」でも取り上げられ、七夕と盆祭りは同義のものだと語られている。また、柳田は死後の靈魂は祖先神となり山から里へ降りてくると考えたが、折口は‘常世の国’と呼ばれるあの世は海の彼方にあると考えていた。

日本に留まらず世界の水の神話を集め分析している吉田敦彦の『水の神話』では、水と女性の結びつきや水が持つ生死を司る力について述べられている。日本の水にまつわる伝説を集めた石上堅の『水の伝説』では水の伝説を紹介しながら、水の力の神秘を解こうとしている。また波平恵美子の「水死体をエビスとして祀る信仰——その意味と解釈」は恵比寿、船魂様といった水神が関係する論文ではあるが、恵比寿の持つ穢れや両義性についての考察といった面が強い。

波平の水の信仰についての考察には「水と信仰」が挙げられる。M・エリアーデ著『Patterns in Comparative Religion』の中の「水と水のシンボリズム」を紹介することで水が如何に多様な性質なのかを述べている。あまりの多様さに、以下の様に結んでいる。

（前略）結果は一層迷路を増したようである。つまり、物理的な性格と水の信仰の諸

相との結びつきについての私の説明は、エリアーデの説明と同じレベルに留まり、「水は人間にとって重要であるがゆえに宗教的に重視される」と述べることを別の表現で言い直したにすぎない。(波平, 1984, p 128)

以上、枚挙に暇がない水にまつわる信仰についての言及の内、数例を挙げた。皆、波平の言う様に、水が信仰されるのは水が人にとって重要であるからだという考えに留まっている。信仰されている水の力は多様で複雑すぎるから、漠然としているとされたままだ⁽²⁰⁾。だが、漠然としていながらも水に何かしら不可思議な力を認め、信仰の対象としていることは確かである。そして、この漠然としたままの状態は、先達の考察を纏めれば、より明確になると思われる。水の信仰される所以である水の持つ能力について、その一部でも解きほぐそうというのが本論の目的と言えよう。

波平はエリアーデの「水と水のシンボリズム」について更に考察している。この考察を纏めてみたい。波平は信仰上・儀礼上、水が多様な意味を与えられているのは水の持つ物理的性格によるものだと考え、説明した。その性格とは「一、水を統制することは困難である」「二、水は多様な形をとる」「三、水には洗い流す力がある」「四、水は形の定まらないものである」「五、水は何よりも、人間の生命維持にとって欠くことのできない重要なものである」という五つの項目に分けて紹介されている。二と四は意味合いが似ており、繰り返されると言うことは二と四で説明されている事が水の特徴的な性格と言えるだろう。波平は二に於いては水は異なるものを融合・統合する力を有しており、再生と復活のシンボルとしての性格があると説明している。四に於いては水がすべてのものを融かし混ぜ合わせる力が、終わりと始まり、つまり死と生の両義性を有することに繋がると説明している。また四に於いては女性も同様の両義性を持っていて水との関係が深いことも述べている。纏めると、二と四に共通することは死と生の両方を兼ね備えているということ、全てを融合・統合ひいては再生する力を持つということである。このことが水の特徴的な性格だと言えよう。これは火や木、音などの他の媒介には見られない特徴である。

柳田は水の掴み所のなさに「拝んだのは、水その物ではなく水の中の何物か」だとすら述べている。確かに、魚や蛇を信仰対象とする伝承は多い。波平もまた、水棲動物は水のシンボルであり、「水の深い底にいて、そこから力を得ていると考えられている」とエリアーデの考えを紹介している⁽²¹⁾。私としては柳田の水棲動物を水と同様に見なす考えより、波平が紹介したエリアーデの水棲動物は水から力を得ているという考えの方が納得がいく。あくまでも水棲動物は水のシンボルであり、水そのものと同一視するには性質・性格が違いすぎるからである。水棲動物への崇拝には、蛇の脱皮などに水の特徴的性格である再生する力を見ることは出来る。但し、融合・統合する力は水棲動物には見られない。このことから水棲動物への信仰と水そのものへの信仰とは微妙に異なっていると言える。

では柳田の言う様に今まで日本人は水その物は畏れ拝まなかったのだろうか。水そのものへの信仰を忘れ、水棲動物の信仰とすり替えて今日まできたのだろうか。水そのものを畏れ拝む風習は無いとは言えない。現に若水信仰が存在しているからだ。日本人は水そのものの力についても感じ取り、信仰対象にしていたと言えよう。水のもつ力についての考察を目的としている為、水そのものが信仰対象であると言える若水について以下に考察したい。

4 章 若水信仰について

若水信仰とは「元旦に汲む水。古くは若返りの水の信仰から発展して立春の水を盛って差し上げると邪気を除く効き目があると考えられてきたが、後世になって元旦に汲む水が若水といわれるようになった」⁽²²⁾若水を信仰するものである。各地で若干の差はあるが同じような風習が存在している。石上の「若返る水」や折口の「若水の話」、また折口の「若水の話」に登場するニコライ・ネフスキーの「月と不死——若水の研究の試み」等に述べられている。

この「若水の話」では、万葉集に見られる変若水〔ヲチミズ〕から発想を得ている。万葉集に「月読の持たる変若水」という言葉があり、⁽²³⁾折口は変若水とは中国の神仙思想に見られる不老不死泉の変形だろうと最初は考えた。しかしネフスキーに指摘を受け、日本に見られる若水信仰の事を指すと考え直す。この指摘とは、以下の引用にある通りである。

宮古島の方言しぢゆん——日本式に言うと、しでる——は、若返ると言うのが、その正しい用語例である。沖縄諸島の真の初春に当たる清明節の朝汲んだ水は、神聖視せられている。ある地方では「節の若水〔シチノワカミズ〕」と言ひ、ある処では「節のしぢ水〔シチノシヂミズ〕」と称えている。言うまでもなく、日本の正月の若水だ。こうした信仰の残っている以上は、支那起源説はあぶない。(折口, 2010, p121／[]内は引用者により読みを挿入)

変若水と同様の水を別の言葉で指す信仰が古くから存在する以上、この若水信仰の影響を考えるべきであるというのが、ネフスキーの指摘したかった事柄であろう。

指摘を受けた折口は‘しぢゆん’という言葉から若水について考えている。‘しぢゆん’という言葉には孵るという意味がある。‘しぢゆん’という形以外にも‘しぢるん・すでゆん’などに近い形で沖縄諸島等で使われている。殻や皮を破って出てくる生まれ方を‘すでる’とも言い、‘すでる・しぢゆん’は同義語である。この言葉の意味を表すようにネフスキーが聞き取りをした宮古島諸島に伝わる神話では、人間に渡る筈のしぢ水に蛇が浸かった事で、蛇は脱皮しては永久の命を生きる様になったという⁽²⁴⁾。これによく似た神話は他にも宮古島諸島に伝わっている。諸島の一部である水納島では五月から六月にかけて、壬または癸の巳か辰の日に、シツウブナカという祭を催す。シツの日の朝には井戸から水を汲み、この水はシツ水と言われ子供たちに浴びせられる。次に挙げる、吉田敦彦が紹介している水納島から報告された神話は、このシツ水にまつわる神話である。

昔天の神様が、このシツミズをもって行って、人間に浴びせるようにしなさいと、ゲアントという鳥を使いに出された。しかしゲアントは餓鬼なので、畠のあぜにタギス（野いちご）があるのをみつけ、うまそうだなと思って地上に下りてしまい、もってきた大事な水をあぜに置いて、タギスを食べてしまった。そこへ蛇やとかげがやってきて、この大事な水を浴びてしまった。そのため人間が浴びようと思ったら水が非常に少なくなって、手足の指先しかつけることができなかった。そのため蛇やとかげは何回も何回も皮を脱ぐことができるが、人間は爪ばかりが生えかわるだけであった。ゲアントは神様に責任を問われ、足を縛られたので、それからゲアントの足は小さくなったという。ゲアントはひばりのことらしい。（吉田，1999，p13）

他にもスデ水にまつわる話には脱皮が関係する。これらの神話からも、‘すでる’という言葉が卵や皮を破り出てくることを指すということが分かる。また、脱皮をするということは、‘すでる’という言葉の内には皮や卵の中にいるような休息期間が前提として存在しており、その休息期間からの脱出が死からの復活に繋がったと折口は説く。古代に於いて

は死もまた休息期間・静止期間であると考えられていたからだ。折口は次の様に述べている。

こうした殻皮などの間にいる間が死であって、死によって得るものは、外来のある力である。その威力が殻の中の屍に入ると、すでるといふ誕生様式をとって、出現することになる。(中略) 一方時間的に連続させて考えるようになると、よみがえりと考えられるのである。すでるは「若返る」意に近づく前に「よみがえる」意があり、さらにその原義として、外来威力を受けて出現する用語例があったのである。(折口, 2010, p127)

つまり人々は、蘇るべく母胎から出る「生れる [まれる]」とは違う誕生の仕方、‘すでる’という生まれ方をするための能力を得ようと、しぢ水であるところの若水を汲む様になったのだ。

折口は初めは飲食によってすでる力を得ていたのが、洗う動作に変わっていったと考えている。その変遷は「魂と水との関係」から来ているらしい。折口が考える「魂と水との関係」とは、先述した若水によってすでる力を得るといふものの筈だ。‘すでる’の原義は「外来威力を受けて出現する」であるから、折口の説では若水が外来威力を与えていると考えられる。では、どのように若水は外来威力を与えるのか。体内に取り入れて外来威力の効力を得ていた筈が、浴びて洗うだけで同じ効果を得られると思われるようになった所に、若水が外来威力をどのようにもたらすか、その仕組みが見受けられるように思う。

そこで、万葉集に見られた変若水という言葉について考えたい。折口は

よみがえりの一つ前の用語例が、すでるの第一義で、日本の「をつ」もそれに当る。

あちらから来るといふ義で、をちの動詞化のように見えるが、あるいは自らするををつ、人のする時ををく（招）と言うたのか。(折口, 2010, p128)

と述べている。また「をつ・いつに当たる琉球の古語「すぢ」は、せぢ・しぢなどのいろいろの形になっている」⁽²⁵⁾とも述べており、変若水＝しぢ水・若水であることが言葉の持つ意味、変形からして分かる。ここで注目したいのは‘をつ’に「あちらから来る」という意味があることだ。すると変若水とはあちら、即ち常世の国と称される祖先霊や神々がいるあの世からもたらされた水という意味だろうか。確かに、ネフスキーも紹介をした宮古群島あたりに伝わっている若水にまつわる神話では、しぢ水・若水は月からもたらされる水であった。万葉集でも「月よみの持ちたる変若水」と月を神格化した月読命の名前が使われ、月との関係性が示唆されている。

しかし、変若水が、異界からもたらされる水という意味だけではないと思える折口の記述がある。「日本にも母胎から出なかった神は沢山あった。いざなぎの命櫛原で祓えのためにすでる間に、神々は、すで水の靈力で生れたことになる」⁽²⁶⁾という記述である。これは古事記に見られる、伊弉諾尊が伊弉冉尊を黄泉の国まで訪ねに行って、現世に戻ってきた時に身を清める為に水浴びをした時の事を指した記述である。ここで折口は、はっきりと、すで水の靈力によって神々が生まれたと述べているのだ。この時に清めた水は現世の水であり、古事記によると「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」の水である。あの世からもたらされた水ではない。では、すで水とはどのような水であると考えられるだろうか。

石上は若水について「歳神の靈魂が、宿っている水をのむことになるので、若返ると信じたとも言える」⁽²⁷⁾と述べている。また、石上は伊弉諾尊の神産みについて、「水を扱うこと――浴びることによって、それ以前の性格や状態とは、まったく違ったものに転じてしまうという要因」⁽²⁸⁾が関係していると述べている。伊弉諾尊が生んだ三貴子が伊弉諾尊と異なった性格・様態をしていたのは、水によって伊弉諾尊の内在魂（生まれながらにそのものの中にある魂）の性格が変えられ出現した為だという。この水が浴びたものの性格や様態を変化させる性格を有する事は、羽衣伝説で知られる天人女房譚にも当て嵌めて「天人は地上の水を浴びて、人間に転生しなければならなかった」⁽²⁹⁾と述べている。私も、禊

の必要ない聖なる存在である天人が何故、禊と見なされている水浴びをするのか疑問に思っていた。私は天人は水辺にしか降り立つことが出来ず、水辺は俗世界である地上に於いて聖なる空間なのだろうと考えていた。それは水が聖なるものと俗なるものの狭間に存在できる希有な能力、媒介する能力を有している為だと考えていたが、石上の言によるとその希有な能力は、転生させる力でもあったようである。

石上は若水に宿っているのは歳神の霊魂だとしたが、私は若水に宿るのは神霊などの力だけではないと考える。また若水はすでる力の様な神霊の力を与えるばかりではないとも考える。前者は伊弉諾尊が身を清めた時、伊弉諾尊の身体に付いた黄泉の国の穢れが阿波岐原の水に取り込まれ、神々という別の存在に再生されたと考えられるからだ。つまり、水は神霊のような正の力だけでなく、穢れの様な負の力も宿らせていると言える。後者は、天人を地上人に転生させたというのは、天人の持つ霊力を失わせ（奪い）俗なる存在に生まれ変わらせるという事と考えられるからだ。合わせて考えると、若水は自身の中に有している力を自身に触れたものに渡し、そのものの性質を変化させ、また自身の中に某かの力を受け取りその力を新たな形に再生すると言えないだろうか。

若水に限らず、神聖視される水にこのような原理は潜在しているのを見ることが出来る。吉田が若水に見られる脱皮との関係性を感じ、村崎真智子著『阿蘇神社祭祀の研究』より紹介した、「衣そそぎの神事」という儀礼がある⁽³⁰⁾。熊本県阿蘇郡にある阿蘇神社で宮司の代替わりに際し行われてきた儀礼である。これは阿蘇神社の祭神の健甕龍命が、阿蘇谷から南郷谷の草部の妃神阿蘇都媛命の元に妻問いした帰り、汗で汚れた衣を洗川の清水で洗って干した神話が由来だとされている。一九八七年十一月四日に行われた祭礼では、阿蘇郡高森町上色洗川の上洗川神社で神事を行った後、神社すぐ下にある井川で、衣ではなく晒しの白布に水をかけ、近くの掛干地区にある天神社の脇に干している。村崎は本来なら宮司の衣に水をそそぐか、水の中に衣を浸けて揺すりすすいだのではないかと推察しており、また、この神事は阿蘇神社宮司の即位式であるとも考察している。衣そそぎの神事は、龍神（水神）である健甕龍命の神話を儀礼的に演じることで、阿蘇神社の宮司が健甕

龍命の子であると示す行為であり、宮司が水霊と融即する行為であるというのが村崎の考えだ。

吉田はこの考察に脱皮を絡め「つまり龍神であり、もともと蛇体に観念されていたと想像できる健甕龍命は、化身である宮司の代替わりのたびに、新たに即位する宮司に融即しながら、脱皮による再生を遂げるとみなされていた」⁽³¹⁾と考察している。「衣そそぎの神事」の最後に行われる、濡らした衣を干す儀礼については、村崎は近世末期に付け足された要素であるとし、吉田は脱皮による再生が完遂されたことを明示する為であると考えている。

この「衣そそぎの神事」は、今までに考察した水（若水）の能力に当て嵌めて考えると、神事に用いられる井川の水に健甕龍命の神霊が宿り、宮司の身代わりである宮司の衣にその力を渡し、宮司の性質を祭神に近しいもの、祭神の化身へと変化させたと言い換えられる。

また、神事の最後に見られる衣を干す儀礼は脱皮の完成を明示するという解釈には、些か首を捻る。この儀礼のもっとよい解釈に相応しい考えを、石上が著書『水の伝説』にて繰り返し述べている。曰く、「水の神を招き呼ぶためには、水の神の一族であるというしるしにそれぞれの体や物を、水で濡らす方法が工夫され、さらにそれが洗う呪法に、置きかえられた」⁽³²⁾のであり、水の神と同族・仲間であるという証の為にも身体を水に濡らしたのだそうだ。つまり「水に浸り・ぬれることによって、水の者の仲間になれる、同一の仲間うちになる、と信じていた」⁽³³⁾としている。私はこの考えから、衣を干す儀礼は脱皮の完成の明示よりも水神の仲間が此処にいるという標を立てているのではないかと考える。あるいは何らかの理由で神を寄りつかせる行為が分化してしまい、衣に神を呼び、宿らせようとしているのかも知れない。

この見解を示す他の事例は幾つかある。代表的なものは水掛け祭といって全国各地にある水を浴びせ合う祭だろう。これは水神の仲間がこれ程いるのだから、此処は水神の来る場所だというアピールに思える。また、ウビナデという沖縄本島でノロ（巫女）の後継者

の額に、神前に供えた水を四回撫でつける儀式がある。ウビナデとは「水撫で」の意味らしい⁽³⁴⁾。他にもホトホトやコトコトと呼ばれる行事で、正月頃に神に扮した者が家々を廻り餅や銭を貰う際、水を掛けられるというものがあり、これは正体を見破ろうとしての事といわれているが神の代理人である証に水を掛けたとも考えられる⁽³⁵⁾。浜下りという海に出て禊を行ったり、あるいは海水を汲んできて家に撒いたりする神事も、やはり家に神を呼ぶ為と考えられる⁽³⁶⁾。

これらの事例にも見られる、石上の言う「水を浴びせかけて、自分らと同じ心（本貫霊）にしてしまう」⁽³⁷⁾水の原理は、3章で述べた水の特徴的性質である、融合・統合し、再生する性質に当て嵌める事が出来る。つまり水は融合・統合する力によって、自身が触れた物を自身と同一のもの（本貫霊）にしようとするのである。また再生しようとする力によって、例えば伊弉諾尊の神産みのように、取り込んだものを変質させ新たな存在を産み出すのである。天人の人間への転生を可能にしたのは、融合する力によって逆に天人の力を取り込み、地上の者と同じ性質にしたと考えられる。

つまり、若水・すで水が、外来威力であるすでる力を如何にして与えていたかという、2章で述べた水の特徴的性質によるものであったのだ。触れるものを融合しようとするのだから吞まずとも、浴びるだけで構わない。沐浴すれば身が清められると考えられたのは水の力によって、穢れが水に取り込まれ、聖なる力に変換されと考えたからだとなると、説明が付く。

考察を纏めると、黄泉の国の穢れも含む異界からの力を自身に融合した物が、すで水・若水だという事になる。この水に宿る正負併せた力とは、言うなればカミの力である。言い換えるならば、すで水・若水とは異界からもたらされた貴い力であるカミの力を宿した水である。水の性質から、すで水・若水は自身に触れたものに対して融合しようとする力を働かせ、自身が宿しているカミの力と一体化させようとし、つまりカミの力を与え、新たな存在に再生する。すで水・若水だけでなく、神聖視される水——例えば三輪神社の神水や禊に用いられる水——はカミの力を宿し与える、あるいは穢れをカミの力に再生する

と考えられていたと思われる。

このように自身の身にカミの力を宿し、人々に与えるということは、カミの霊験や畏怖を人に示している事になる。即ち、カミと人との媒介と言えよう。カミである水母神を始め母神が水と関係が深いのも、彼女達自身が水辺から動かず人々の元を訪ねなくとも人々が彼女達の霊験を感じられたのも、彼女達が水を通して霊験や畏怖を人々に示していた為なのである。

以上から、水の媒介としての力について再確認すると同時に、水がどうやって媒介するのかという原理を考察、提示するものである。

5章 水の女

水の持つカミと人との媒介の力について、もう少し考察を深めたい。そこで本章では‘水の女’について、取り上げたい。

3章、4章に於いて考察し得た水の原理を以て、人々が力を得ようとする時、その手助けをするとされていた女性の存在があった。折口が「水の女」で考察している、神の嫁ともなる巫女のことである。出雲風土記に「水沼於而、御身沐浴ぎ坐しき。故、国造の神吉事奏して朝廷に参向ふ時、其水沼出而用ゐ初むるなり」⁽³⁸⁾と記された水沼〔ミヌマ〕は、水が流れ出た様子か水溜まりと思われている説が殆どだが、折口は禊を手助けした巫女であるとしている。神になりきるべく水に潜り、水中で巫女達の手によって彼女達にしか分からない衣の結び目を解いて貰い、衣を脱がして貰うことで、禊をした者は神の資格を得ていたというのが折口の考えである。

水の女には乳母も対象に入れられており、産湯をかけることも禊と同様に神聖視されていた。石上は「産湯は、生まれ出た子に、人間の子としての靈魂（ウブ・子供霊）を、その体内に入れこめてやるための湯であるので、ウブユと呼ぶ」⁽³⁹⁾と産湯をかけることを靈魂を人に入れ込める神聖な作法と考えている⁽⁴⁰⁾。産湯は捨てる場所も、日の当たらない縁の下や墓地が良いとされたり、捨てる方も盥を揺すらずに静かにあけ捨てるだとか、細かい決まり事が作られている。これは、それだけ産湯を重要視していた事の表れであり、赤ん坊という最も生命力の強い存在に触れ、産湯がその子供の魂と一体化してしまっていると考えられたのだろう。また石上は「内在魂であるひを、円満に育てることがひたすであり（中略）この内在魂の誕生を、ひる（産む・卵を生む）・ひよける（孵化する）などと用いた」⁽⁴¹⁾と紹介し、このひたす役に就いていた最高巫女が大日靈貴〔オオヒルメムチ〕（天照大神）であるとし、日靈という言葉の指す意味は「聖水による呪術によって（貴の意〈貴

〔ムチ〕の言葉の持つ意味)、ひ(内在魂)の誕生・復活をもたらす巫女神——ひる女神の義が、根底にあったろう」(42)と考察している。

折口も、石上も水を扱う水の女を巫女であると考えていた。そして、折口はこの神に近い女である巫女が、やがて水の女神へと誤認されていったと指摘している。折口は「汝売〔ミヌメ〕・宗像・水沼の神は実は神ではなかった。神に近い女、神として生きている神女なる巫女であったのである」(43)と明言している。

巫女が水界や蛇神と関連が深かったことはブラッカーも考察している(44)。ブラッカーは巫女は蛇神・水神の嫁になり、それがいつしか犠牲者と見なされ、やがては道成寺の清姫のように火性の蛇と結合するようになったと述べた。この火性の蛇に変容していく課程にはシャーマンが体内に持つ呪術的な熱が関係するとブラッカーは解説している。

ここで興味深く感じるのは火性に転じた巫女は最早、巫女ではないところだ。道成寺の清姫は、そもそも巫女であるとは明記していないが、しかし彼女は川を超えると人ではなく蛇になり、火を吐いて最後は自身も焼き尽くす。石上のいう大日靈貴は最初は水の呪術を制する巫女であったかもしれないが、後には天照大神という太陽神すなわち火性に転じており、巫女ではなく神になってしまっている。

この考えを踏まえて私は折口の考えに首を捻る。巫女と水の女神は似て非なるものの筈である。確かに宗像神は海の航行の守護神、水沼神は禊の神であり、母神としての性格は感じられない。また水沼神などは巫女のような性格を有している。だが、だからといって神ではなく巫女だと言い切れるだろうか。それは、水棲動物を水そのものとみなす考えと同じようなものではないだろうか。始めから水の女神と巫女の存在は別々であり、巫女は水の女神の代理人、映し姿に過ぎないのである。巫女を水の女神と同一視すれば、最早それは巫女ではないし、極端を言えば水性も帯びなくなってしまうかもしれない。人が人を超えて存在できる限界は、巫女のような異界と現世の狭間の存在であろう。その先を超えることは人では許されなかった筈だ。清姫が自身の火によって死んでしまうように。古代は現代よりもっと信仰を重用視した時代であり、古代に於いては現代よりも、異界は現世

に近かったかもしれない。だが、だからこそ、その境目は慎重に取り扱われていた筈である。女神の存在から巫女の介添えを必要としたとは考えられるが、逆に巫女を神と同一視する、巫女の存在から女神の存在を創るという現象は考えにくい。

そもそも巫女が水の女神に誤認される程に水と関係が深いのは何故だろうか。私は水の媒介能力と巫女の憑依能力に近しいものがある為だと考える。どちらも自身の中にカミやカミの力を宿すことを可能にしている。この宿すという能力は、かつて卒業論文で母神信仰について考察した時に得た、母神の能力でもあった。つまり、母神と水と巫女は同様の能力を有しているという点で共通している事になる。そして、この三者は関連づけられて語られることが多いのである。

母神と他の二者が違うのは母神はカミであるということである。擬似的に宿したものと同質のものになる二者とは違う。彼女は原初の存在であり、媒介である水と巫女によって現世と繋がる。だが一方では現世とのコンタクトが取れる存在を産み出す点で、ある種の異界と現世との媒介でもある。また水と巫女の差異は、水がカミと同等の存在にはなれないことである。あくまでも水はカミの力を人々に運ぶだけであり、水だけそのものをカミとみなすのは難しい。水の背後にはいつもカミがあり、水はカミを感じる為のツールなのである。人々の水への信仰は、媒介としての水の力への畏敬の表れなのである。水の力の証に水棲動物をも崇拝対象にしたのだろう。

では巫女はどのような存在だろうか。彼女達は生きている神の如く扱われ、神の代理人として崇拝の対象でもある。新興宗教の教祖が巫女であった例は多いし、先述した様に天照大神が巫女神として巫女にみなされていた例もある。もっとも私はあくまでも天照大神は神であり、どちらかと言えば母神の傾向が強いと考えている。天皇家の祖先神とされているニギノミコトは天照大神の孫である。あくまでも巫女は神の代理人であり、神ではないという考えだ⁽⁴⁵⁾。神の言葉を語ることが出来ても、それは神が憑依した一時だけで神が体から離れたら巫女は人間、厳密には神に近い人間に戻るのである。また自分の守護霊を通してとは言え⁽⁴⁶⁾、様々な神や、あるいは死者の霊を彼女達は憑依させる。言告げと

いう神の言葉を語る儀礼の際には神の名前を告げるのが常であるし、死者を下ろす際にしても特定の個人を下ろすよう依頼を受けて憑依を行うのが常だ。これでは、憑依する者はころころと性格が変わってしまっている。彼女達自身が神なのだとしたら、それは道理が通らない。カミとして考えても、そもそも彼女達はカミに体という器を貸すのであり、彼女達自体は現世にいる。シャーマンという存在の中には異界まで精神を移動させる事が可能なものもいるが、日本民間信仰に於ける巫女は器を貸す能力だけであった筈である。

やはり、巫女は媒介であるからこそ様々な神や死者の霊を宿せるのである。巫女を崇拝対象にしてしまうのは巫女の媒介としての能力への畏敬の為であり、あるいは水の力の証を水棲動物に見たように、カミの力の表れを巫女達に見るからである。但し、巫女は水と違い意識を持ち行動する分、神に近い存在になる事ができるが、水と違い人々に自身を通してカミの力を与える事は、神の言葉以外には難しい。

このように媒介に過ぎない巫女を神と見なすことも妙であるし、媒介に過ぎない水を水棲動物と同一に見なすことも妙なことなのである。媒介されているものと媒介自身を混同する、同一視するということは、変質しないという媒介の能力を否定してしまうことであるからだ。

6 章 まとめ

以上、日本人の世界観・死生観の一部と考えられる水の力について、母神との関係も絡めて考察した。結果、水が異界と現世を媒介する力を持つことの確認、そして水がどのように媒介しているのかという原理について新しい見方を示せたように思う。また、母神、水、巫女の三者の共通点と差異も発見できた。1章で立てた仮説のように母神と水が深い関係にあったのは、母神の能力と水の能力に宿すという共通点があったこと、そして、自身は動くことのないカミであるという母神の性質と水の媒介能力とが合致した為であった。これらのことから私は信仰に於いて重要視されているのは、やはり宿すという能力ではないかと考える。

そして、ここが肝要なのであるが、宿すということは自分とは別の存在を受け入れることを前提としていることだ。つまり、宿したものと宿ったものは別個の存在なのである。そして自身は変化せずに、宿ったものの変化を助けるのが、‘宿す’ということなのである。そもそも媒介とは、自身は変質せずに物質同士を結びつけ変化をもたらす要素である。

だが、いつしか宿すという媒介能力は人々の意識の底へ埋もれてしまったようだ。水の力への信仰は、水の力の表れに過ぎなかった水棲動物に対象が移された。自身の身体に神を宿し、異界との媒介として存在していた巫女は、いつしか巫女そのものが神になれるかのように錯覚されてしまった。そして母神の信仰は彼女がもたらした靈験の表れである子神や代理人に対象が移され、あるいは価値あるものを与えてくれるだけの存在になってしまった。母神が我々に与える前に、その与えられたものは母神の内部で変化を遂げているということを意識しなくなってしまったのである。それでも、異界との媒介は存在するという意識だけは消えなかったのだろう、人々は異界と現世を行き来する為には、海を越え、あるいは井戸を通り抜けたり橋を越えたりすると考えたのだった。

折口は「靈魂の話」で魂が、例えば布団のような物の中へ入ってきて、次の形を完成すると考えていた。折口はその際、中に入った魂は外気に当たらなければ、変化を起こすと述べている。これは、変化をする為には外気に触れない様な空間が必要だと言うことである。カミの力も魂のようなもので、カミから離れ人に渡される際、天人が人になったように現世にそぐう形に変質せねばならないのかもしれない。その為、媒介である水や巫女の中で変化を起こすのだ。このように民間信仰に於いて宿す能力が尊ばれるのは、宿すもの達が自身を変質させることなく、自身とは別個の存在を自身のなかに有し、宿ったものの変化を可能としたからだろう。

‘宿す’という能力は妊むと言い換えても良い。妊婦は自分とは別個の子供を自身の子宮に妊む。この妊むという行為は、ただ子宮の中に胎児を入れておくだけではない。子宮の中にいる胎児を育てる行為も含まれている。柳田の唱える女性の持つ不思議な靈力「妹の力」は何故、女性に備わっていたのか。女性が感性が神経質なまでに鋭いからだと言われているが、私は妊む能力を女性に見たからだと考えている。女性だけが妊娠する事が出来るのだ。

もっとも宿す力は受胎という言葉ではキリスト教にも見られる。また山折哲雄は『死の民俗学』にて、ダライ・ラマ五世の死後四十九日の間に受胎した子供をダライ・ラマ五世の転生者候補に見なしたエピソードを紹介している。これは、ダライ・ラマ五世の靈魂が胎児の中に入り込んだ、つまり宿ったという考えだろう。

山折はまた、日本人は遺骨を通して靈魂を祀ったとも述べている。古代の日本では腐敗した遺体から骨を取り除き、洗骨する習慣があった。山折は骨を通して死霊を浄化する為と考えたようだ。私はこの浄化とは、骨の中に宿っている靈魂を、異界の存在に変質する事だ考える。骨に宿った魂を、水の媒介によって異界に送るのである。確かに山折の言うように日本人の遺骨への執着というものはあるかもしれない。だがそれは遺骨に限らず、遺髪でも遺品でも代替可能であるように思われる。要は、亡くなった者の魂が宿っているかどうかという事なのである。魂が宿ると考えられたものは骨ではなかった筈だ。日

本人はあらゆるものに宿す能力を見出す事に長けていたからである。

宿すという能力への関心は日本の民間信仰以外にも見受けられる。だが、事と次第によっては何処にでも何にでも宿す能力を見出したのは日本人の信仰の特徴と言えよう。日本人にとって妊むのは人や動物だけではなかった。水や石や、木など、極めて多くのものに妊む力はあったのである。この宿す能力を広く見出していたことが、外来の宗教と共存することのできた強みだろうと思う。何故ならカミは何にでも宿ることができた為、姿が決まっていなかったからである。神に分化した時に初めて、その性質や宿る場所が決定した。カミが何にでも宿る可能性があったから、様々な神が誕生し、その中の一つに仏も加えられていったのだろう。

有る意味、日本の民間信仰にこそ、宿す力——ひいては妊む力が一番見出せるのかもしれない。そして、あらゆるものに妊む力を見出す、この考えこそが日本人のもつ世界観・死生観の大きな特徴ではないだろうか。この世界には宿るものと妊むものが沢山いる。生まれてくることとは、宿ったものが変化を終えて妊んだものから出てくることである。宿ったものは異界からやって来て現世に相応しい形態に変化し、誕生するのである。そして死ぬこととは、葬送儀礼を経て異界に相応しい形態に変化し、再び異界に戻ることであった。故に、古代に於いて、死ぬことを‘隠れる’とも言い表したのではないだろうか。また現在でも死ぬことは‘逝く’‘旅立つ’とも言い、異界へ向かうことを彷彿とさせる表現をするのである。

以上が水の力を主軸とした日本人の世界観・死生観についての考察である。

⁽¹⁾ 喜多『母神信仰』出口『原始母神論』吉田『水の神話』参照

⁽²⁾ 石田「桃太郎の母」p182 引用。また柳田は『伝説』に於いて水神と女性の関係を蛇婿入りなどの神婚譚から考察している。更に「隠れ里」では水の神を女と考えるのは古くからの考えだったとしている。

⁽³⁾ 石田「桃太郎の母」p236 引用

⁽⁴⁾三品『神話と文化境域』参照

⁽⁵⁾「府中の町に近い人見村の浅間様などは、村の西北の岡の下に清水があつて、御神体の一尺ばかりの銅の御像は、最初その泉の中から出現したと伝へて居た」(柳田「武蔵野と水」p453) という例もある。

⁽⁶⁾柳田は「日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰」(柳田『先祖の話』p61) であると述べている。だが、国土に留まると言っても、それは別次元の話であり、死後は山向こうのあの世という異界に旅立ってしまったと考えている。

⁽⁷⁾折口「靈魂の話」 p 261 引用

⁽⁸⁾同上 p261 引用

⁽⁹⁾ブラッカー『あずさ弓』 p 24 引用

⁽¹⁰⁾同上 p25 引用

⁽¹¹⁾同上 p29 引用

⁽¹²⁾同上 p33 引用

⁽¹³⁾熊本県玉名郡にある小部落に伝えられてきたハナタレ小僧の話を紹介している。このハナタレ小僧は、売れない薪を淵に沈めた爺の前に、美しい上臈に抱かれ水中から現れるのである。そしてハナタレ小僧は爺の元に渡され、爺に家財産を与えるが、爺がエビをハナタレ小僧に与える約束を面倒に思い元の居場所に帰るように頼むと、与えた家財産を消し立ち去ってしまう。どちらかと言えば、このように女性が子供を抱いて現れるのは珍しく、多くは人間を水中に案内し、水中にて子供を渡す。(柳田「海神少童」参照)

⁽¹⁴⁾‘たま’の入った石が運ばれるのは「常世の波にうち寄せられて」であると述べている。(折口「靈魂の話」参照)

⁽¹⁵⁾笛の音が水神に愛され呼び出すとも考えられていた(柳田「米倉法師」 p 548～参照) 他の事例としては、私が地元の神社(伊奈富神社)にて、神を新しく建てた社の中に移す神事を見学した際、神事に携わる宮総代達が「おう」という掛け声を挙げていた。神への呼びかけと見られる。

⁽¹⁶⁾松明祭など火を用いた祭りはよく見掛けられるが、媒介というより清める意味合いの方が強く感じる。(柳田『分類祭祀習俗語彙』参照)

⁽¹⁷⁾柳田「米倉法師」 p 551 引用

⁽¹⁸⁾柳田「龍王と水の神」 p353 引用

⁽¹⁹⁾柳田「魚王行乞譚」 p 437 引用

⁽²⁰⁾柳田は「神道の方では水の力すなわちその物を洗い滌ぐ性能を非常に重んずる」(柳田

「物忌と精進」『日本の祭り』p301)と水の力は禊にあると思っていたらしい。

(21) 月と水の関係から月に縁のあるとされる蛇、蟾蜍、熊、犬などの動物が水神や水精の性格をもつとも考えられている(石田「月と不死」参照)

(22) 福田アジオ他編「日本民俗大辞典 下」引用

(23) 万葉集 卷十三 三二四五の歌のこと。石田は「天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月よみ[ツクヨミ]の 持たる変若水[ヲチミヅ] い取り来て 君に奉りて 変若得しむ[ヲチエシム]もの」(石田「月と不死」p17/[]内は引用者により読みを挿入)と表記しているが元は「天橋文 長雲鴨 高山文 高雲鴨 月夜見乃 持有越水 伊取来而 公奉而 越得之早物」(小島憲之他「萬葉集3」p400)と表記されている。ヲチミヅの読みについての簡単な解説は石田著「月と不死」に載っている。

(24) ニコライ・ネフスキー「月と不死(二)」参照

(25) 折口「若水の話」p129 引用

(26) 同上 p135 引用

(27) 石上「若がえる水」p10～p11 引用

(28) 石上「転生の水」p83 引用

(29) 同上 p85 引用

(30) 吉田「若返りの水と死の水」参照

(31) 同上 p34 引用

(32) 石上「神をよぶ水」p170 引用

(33) 石上「本性露見の水」p63 引用

(34) 柳田『分類祭祀習俗語彙』参照

(35) 柳田「神に代りて来る」参照

(36) 柳田『分類祭祀習俗語彙』参照

(37) 石上「神を呼ぶ水」p157

(38) 「水沼」は『風土記 新編 日本古典文学全集5』では「水活」と書いてある。どちらが正しいかは判然しない。

(39) 石上「神を育てる水」p43 引用

(40) 宮田登「擬死再生の信仰」『ユートピアとウマレキヨマリ』にも同様の記述がある。

(41) 石上「神を育てる水」 p47 引用

(42) 同上 p47 引用。また引用内〈〉内は引用者による補足説明。また折口は‘むち’と‘ふち’は変化しているが同じ意味であり、‘貴’は‘淵’であるとしている。(折口「石に出で入るもの」参照)

(43) 折口「水の女」 p 96 引用

(44) 古代の女予言者である巫女が水や蛇に関係する神に仕える為に選ばれた女性であったと三輪山神婚譚・古事記に記された豊玉姫の神婚譚を例に説明している。(ブラッカー『あずさ弓』参照)

(45) 柳田は巫女は神の子孫であると述べている。(柳田「巫女考」参考) 仮にその考えの通り、神に通じるものが巫女に備わっていたとしても、カミそのものではないと言えよう。神の子孫であることは宿すという能力を身に着けて生まれてくる事を可能にしている要素に過ぎないを考える。

(46) 巫女は自分の守護神（蛇神が多い）をもつとされている。(ブラッカー『あずさ弓』参照)

参考文献

石上堅 1969『水の伝説』雪華社

石田英一郎 2007 (1948)「桃太郎の母——母子神信仰の比較民族学的研究序説——」

『新訂版 桃太郎の母』株式会社講談社

———— 2007 (1950)「月と不死」『新訂版 桃太郎の母』株式会社講談社

植垣節也校注・訳 1997『風土記 新編日本古典文学全集 5』小学館

折口信夫 1972 (1929) a「たなばたと盆祭りと」『折口信夫全集』第三巻 中央公論社

———— 1972 (1929) b「靈魂の話」『折口信夫全集』第三巻 中央公論社

———— 1973 (1932)「石に出で入るもの」『折口信夫全集』第十五巻 中央公論社

———— 2010 (1920)「妣が国へ・常世へ 異郷意識の起伏」

『古代研究 I 一祭りの発生』中公クラシックス中央公論社

———— 2010 (1927, 1928)「水の女」『古代研究 I 一祭りの発生』中公クラシックス

中央公論社

———— 2010 (1932)「若水の話」『古代研究 I 一祭りの発生』中公クラシックス

中央公論社

Carmen Blacker 1995 (1975)『あずさ弓 (上)』秋山さと子訳, 岩波書店

喜多路 1994『母神信仰』錦正社

倉野憲司校注 1972『古事記』岩波書店

小島憲之, 木下正俊, 東野治之校注・訳 1995『萬葉集③ 新編日本古典文学全集 8』

小学館

出口米吉 1998『原始母神論』一川村邦光編『性の民俗叢書 3』勉誠出版(株)

波平恵美子 1984「水の信仰」『理想』7巻 614号 理想社

波平恵美子 1988 (1978)「水死体をエビスとして祀る信仰——その意味と解釈」

『ケガレの構造』青土社

ニコライ・ネフスキイ 1928「月と不死(二)」『民族』第3巻 4号 民族発行所

福田アジオ, 新谷尚紀, 湯川洋司, 神田より子, 中込睦子, 渡邊欣雄

2000『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館

三品彰英 1948『神話と文化境域』大八洲出版株式会社

柳田国男 1962 (1924)「神に代りて来る」『定本柳田国男集』第二十巻 筑摩書房

———1963『分類祭祀習俗語彙』角川書店

———1977 (1931)「武蔵野と水」『定本柳田国男集』第五巻 筑摩書房

———1977 (1940)『伝説』『定本柳田国男集』第五巻 筑摩書房

———1977 (1941)「龍王と水の神」『定本柳田国男集』第二十七巻 筑摩書房

———1996 (1918)「隠れ里」『柳田国男全集』6 ちくま文庫 筑摩書房

———1996 (1930)「魚王行乞譚」『柳田国男全集』6 ちくま文庫 筑摩書房

———1998 (1930)「海神少童」『柳田国男全集』第6巻 筑摩書房

———1998 (1932)「米倉法師」『柳田国男全集』第6巻 筑摩書房

———1998 (1933)「田螺の長者」『桃太郎の誕生』『柳田国男全集』第6巻

筑摩書房

———1998 (1913~1914)「巫女考」『柳田国男全集』11 ちくま文庫 筑摩書房

———1998 (1925)「妹の力」『柳田国男全集』11 ちくま文庫 筑摩書房

———2006 (1942)「物忌と精進」『日本の祭』『柳田国男全集』13 ちくま文庫

筑摩書房

———2006 (1946)『先祖の話』『柳田国男全集』13 ちくま文庫 筑摩書房

———2009 (1956)『妖怪談義』講談社

山折哲雄 2002『死の民俗学 日本人の死生観と葬送儀礼』岩波書店

吉田敦彦 1999「第一章 若返りの水と死の水」『水の神話』青土社